

語「勉強(する)」の選択の要因の会話分析的研究

千々岩宏晃

要旨


本稿は、名詞「勉強」ならびに漢語サ変動詞「勉強する」が、雑談において再選択される際に、どのような相互行為的要因がその選択に影響を及ぼしているかを記述したものである。その結果、語の選択には①修復による再選択と、②修復によらない選択に大別できることが分かった。また、①には、a)他部を前景化させる、b)描写を最適化する、c)行為に適した発話デザインを行う、の3つの要因があることが明らかになった。さらに、この分析により、I: 語の(再)選択はいわゆる「類義語」の中から行われるわけではなく、局所的・相互行為的な調整に要因を持つこと、II: 「勉強」という語が持つ否定的イメージはその使用から導出される可能性があること、の2点が明らかになった。

キーワード：「勉強」、相互行為、語の選択、選択の要因、語の意味・イメージ

1. 研究背景

日本語の漢語名詞の「勉強」、ならびに漢語サ変動詞である「勉強する」は、「学び」や「学ぶ」「学習する」などと同義の意味を持つ(鈴木・湯・梅野, 2021)とされている。また、その違いは位相(register: Hudson, 1996: 45)、特にその「主題(subject)」や「話題(topic)」にかかわるものであることがまずは想定できる(cf. 田中[他], 1996: 97-98)。例えば、より(学校)教育制度にかかわる主題で用いられていれば、“頭に知識や技術を入れる”ということは、「学習」や「学ぶ(動詞)/学び(名詞)」といった語で表現され、逆に、雑談や日常生活に近いものであれば「勉強/勉強する」という語が用いられるようになる、という想定である。

表1 名詞「学習」/「学び」「勉強」およびその動詞形の使い分けの一例

教育の主題	学習 / 学び	勉強
	○学習科学・自律学習・学習能力	*勉強科学・自律勉強・勉強能力
	○主体的で深い学び	?? 主体的で深い勉強
	○(学校にある)学習室	?? (学校にある)勉強室
	? (家にある)学習部屋	○(家にある)勉強部屋
	?? 学習不足	○勉強不足
日常の主題	?? 友人: 昨日図書館で学んだよ	○友人: 昨日図書館で勉強したよ

また、動詞のアスペクト(cf. 畠山, 2008; 岩本・井本, 2008; Ryle, 1949=1987; Vendler, 1967)に注目す

れば、「勉強する」は動作 activities、ないし過程 process 動詞および非限界動詞である一方で、「学ぶ」「学習する」は達成 accomplishment 動詞ないし限界動詞的⁽¹⁾であるという違いがある。例えば、「二次関数を勉強」しても、試験で十分に点数を取れなければそれは「学習した」とは言えない。この点においては、「勉強する」はむしろ「走る」「泳ぐ」などに類似しているため⁽²⁾、「類義」しているとはいえないのである。

しかし、これらの想定は母語話者の直観として納得できるものの、母語話者の直観を用いた「想像」に過ぎないといえるだろう。例えば、語が文脈に合わせて相互的に調整されて用いられる様子を十分に観察しなければ、次のような断片 1 を説明できない。

断片 1. CallFriend japn6228

((留学している相手の留学先の状況を聞いて、評価している。))

015 L: → ①まあ勉強②とか③そういう学習 - ④なんていうのぉ？

016 L: (0.2)⑤そういう意味ではあ :: ⑥トレーニングっていう

017 L: 意味ではさすごいやっぱいい環境だと思うよぉ .

ここでの話者 L の発話は、①「まあ」の後に「勉強」が用いられ、②「とか」で並列され、③「そういう学習」の発話が途中でカットオフ cut-off され、④「なんていうのぉ？」⑤「そういう意味では」と表現の再考が行われ「トレーニング」という語が最終的に選択されているように見える。この際、話者はほとんどその文脈に沿ったものを同義の語彙から「選択する」ことなく、直観的に用いているとも考えることができる (cf. Alba-Juez, 2021)。ここでは、語の(再)選択が心の中で行われているというよりは、話者がその相互行為に合う語を漸進的に選択しなおしているように見えるのである。

となれば、これらの語の選択の原因は、書記言語を用いる際にある語を吟味するというような活動とは異なる。語それのみを観察することでは、これらの類義語ないし同義語からの語の選択を精確に記述することは難しいのである。話者が置かれている状況、すなわちその場で行われる言語行為・相互行為 (Enfield & Sidnell, 2017) 的文脈を見る必要があるのである。

このことから、本研究では以下のリサーチクエッションを設定する。

日常会話において「勉強する」という語が(再)選択・ならびに被(再)選択される際、シーケンス構造上で選択の要因になっているものは何か。

2. 語の選択に関する先行研究

本稿の目的は、その相互行為的文脈において、特に語「勉強」に着目し、語の(再)選択が行われている様子を記述することである。その記述を用いて、選択要因、言い換えればそこで語

彙選択に有意になる要素を記述する。

さて、話者が類義した語群からどの語を選択 word selection するかは、現在、言語哲学や言語心理学、認知言語学の研究において進められている。これらのアプローチでは、哲学的議論、ないし心理学的・認知的な知見に依りつつ、またはそれを前提として、話者の内的な事態として語の選択を研究している(篠原, 2019; 寺尾, 2002; 古田, 2018; Alba-Juez, 2021; Kecskes, 2013など)。

本節では、語の選択に関する先行研究を概観する。2.1では、ウィトゲンシュタインの言語哲学の中で語の選択がどのように扱われてきたかを古田(2018)を紹介することで述べる。次に、2.2では、特に話者の内面を推定するような認知主義的な研究を紹介する。最後に、2.3では相互行為の分析における語の選択の研究を概観する。

2.1. 語の選択に関する言語哲学的研究

古田(2018)は、ウィトゲンシュタインの言語哲学を出発点として、「我々は日常の生活のなかで、言葉同士を比較し、評価し、口に出すべき言葉(あるいは、書き出すべき言葉)を選び取る、という実践を行っている」という(p.112)。例えば、ある友人の性格について尋ねられたときに、「弱い」が思い浮かぶが「しっくりこない」ために、「繊細」「上品」「温厚」等に「連想を広げ」ていき、最後に「やさしい」という言葉に至ってぴったりだと満足し、それを口に出す、というような場合である(pp.112-113)。

古田(2018)はこの時、「やさしい」という語が他の言葉には置換不可な固有性をもって話者に立ち現れるとき、その語に対応する「実体としての魂が超然と存在するわけではない」と警告する(p.118)。そうではなく、言葉が固有性をもって現出することは「特定の文脈」の中で起こり、「ある文脈を背景に、あるタイミングで発せられた、あるトーンの言葉が、ある表情や響きをもって我々に立ち現れてくる」と言う(p.118)。我々はある語が様々な語と連続した関係として、すなわち多面的立体として理解しており、その中から必要があればそれに応じて自覚的に選び取ることができる、そのような<言葉の場>にあるという(p.132)。

古田(2018)による語の選択が「文脈」にあるという指摘は、語の意味そのものを比較してその意味ならびにその選択を議論するということに比べ示唆的である。しかしながら、古田(2018)では、以下のような場合を説明することは目標とされていない。

断片 2. CallFriend japn6277

- 039 Taku: → .hhh 歴史をなんか二つ勉強してるような感じじゃん .
 040 Kazu: はん?
 041 Taku: → 歴史を二つやってるような[感じでしょ?]
 042 Kazu: [うおお:::]

この場合、039行目を発し、040行目で何らかのトラブルが起こったことが会話からわかる。

それを解消するために041行目でほぼ同じ発話が繰り返されているが、しかし「勉強してる」が「やってる」に選りなおされている。仮に、039行目で「勉強してる」と実際に発した語が連想の上でたどり着いた“ぴったりする”語であるならば、041行目で「やってる」に置き換えるのは不自然ではないか。一方、この間に起こった出来事は040行目 Kazu の発話「はん?」である。これによって、Taku が発話デザインを変えたと考えるほうが、話者の内的な想像を行うより妥当だろう。このことから、古田(2018)の想定では、「特定の文脈」という概念、また「<言葉の場>」という概念が、会話の他の参与者、すなわち相互行為的視点を含んでいないことがわかるのである。

2.2. 語の選択に関する認知主義的アプローチの研究

次に、語の選択を認知的な視点からとらえた研究を概観する。語の選択に認知的な要素がかわるだろうと仮定することは想像に難くない。例えば、Kahneman (2011)の思考二分法⁽³⁾を援用した研究(篠原, 2019)では、語の選択は主に System1 (直観的思考)で行われていることを指摘し、「日常の経験を蓄積し、最適である可能性の高い展開に近づけるように準備」されているとされている。ここで話者が「選択肢のあらゆる可能性を考える」のは「負担が大き過ぎ」る(p.40)のである。それゆえ、我々は語の様々な意味を最適に参照しつつ、「瞬時に最適な表現にたどり着くことが可能」(p.43)であるという。

同様に Kahneman (2011)を援用した Alba-Juez (2021)は、この System1 直観的思考は、我々が「与えられた状況に沿って適切な語を用いる」際に用いられることを推定している(p.72)。ここには、状況に応じて話者が他者の行為・語を解釈したり、行動・発話したりするような語用論的知識 pragmatic knowledge が含まれており、特別な演算や観察を必要とせずに、日常の相互行為を行うことができるのである(p.72)。

以上の研究は、Kecskes (2013)が述べるような Socio-Cognitive Approach (社会認知的アプローチ)と類似する。このアプローチにおいては、語の選択は情報の Salience (突出性)によって決定される。話者は、過去の経験や記憶を呼び覚まし memory activation、今から行おうとする発話の動機や目的に最も沿う、突出した(≒重要な)情報を選び取り、それを相手が概念的に理解可能か conceptual accessibility を判断したうえで言語リソースを用いて産出するのである(p.75)。

これらを踏まえて、先の L が発話中に語を再選択している断片 1 に戻ろう。確かに、瞬時に System1 直観的思考が System2 熟慮的思考に切り替わって、さらに System1 に戻ったという解釈も可能であろう。また、Kecskes (2013)の述べるように、①「まあ勉強」が発話の動機や目的に沿わない語であったということも可能かもしれない。ただし、ここでは(a)さほど難しい語であるにもかかわらず、瞬時に最適な表現にたどり着いているとはいえず、(b)なにか特殊な演算(熟考)をしているようにも見え、また(c)沿わないのであればなぜ産出前にそれが Salience によって排除されないのか、という疑問が生じるのである。

断片 1 再掲 CallFriend japn6228

015 L: → まあ勉強②とか③そういう学習 - ④なんていうのお？

016 L: (0.2)⑤そういう意味ではあ :: ⑥トレーニングっていう

017 L: 意味ではさすがいやっぱいい環境だと思うよお。

この現象の説明を社会認知的アプローチ、言い換えれば認知主義的な説明に求めるとき、それは話者の内省的な要素を羅列することになりかねない。そこでは最終的に、システムのエラーであるとか、「話者が単に間違えた⁽⁴⁾から」「話者が緊張したから」等の、例証できない仮説や解釈になってしまうのである(cf. Sharrock & Coulter, 2009)。ここには、「性急な一般化」がなされている可能性(Hacker, 1996: 173; 飯田, 2007: 588)が示唆される。

しかし、すでに見てきたように、語の(再)選択は、語の意味はもちろんのこと、その場の状況や、聞き手の反応に左右される。このことから、相互行為的な言語使用の場において、我々が「ある語を選択する」ということは、その場その場の言語構造や聞き手による制約・要請などの局所性に沿い、またそれに違反しつつ行われるものであるといえる。この局所性の解明には、相互行為的な言語学的な研究アプローチを用いて選択の要因を明らかにすることが求められると言える。

2.3. 会話分析における言語選択と修復組織に関する研究

語の選択を心理的・認知的な作用とみる一方で、相互行為的な立場から見ることにも可能である。相互行為言語学において強力な分析手法として用いられる会話分析において、語の選択は主に修復組織(repair organization)の研究として発展してきたと言ってよい。

修復組織とは、会話において、発話の産出・聞き取り・理解(Schegloff, 2007)にかかわるトラブルが起き、ある行為の発効が起らないとき、「発話や連鎖の進行をいったん中断し、トラブルの解決に向けて対処する手続き」を指す(串田・平本・林, 2017)。

例えば、Schegloff (2013)は、話者が自己開始・自己実行の修復の場合、そこには10種類の観察可能なパターンが現在までの先行研究から明らかにされた⁽⁵⁾と述べてつ、その一つに「検索 searching (言葉探し word search)」があることを述べている。先の断片 1 を見ると、③「学習 -」でカットオフ(声門の閉鎖による発話の中断)が起り、④「なんていうのお？」という言葉探し word search (Goodwin & Goodwin, 1986; Schegloff, 2013)が行われる。ここで L は、「学習」に続くべき発話の「進行をいったん中断し」、そこに産出の「トラブルの解決に向けて」自己開始⁽⁶⁾修復を用いている。さらに、⑤「そういう意味では」と「再構成」の自己修復を実行している。さらに、「そういう意味では ::」と引き延ばしを行うことで追加で修復を自己開始し、⑥「トレーニングっていう意味では」に修復を実行しているのである。

修復組織を語の選択という観点で見れば、修復をすることは、自らに語の誤選択などの産出のトラブルがあったことを遡及的に明示化し、その実行によってある語を何らかの形で置き換

えたことを他の参与者に示す(相互的)行為であるといえる。また、「なんていうのお?」等を用いる言葉探しの場合について言えば、それらは発話産出上、ターンを保持し続けることであり、その後に来うる語があることを他の会話参与者に示すことになる(Endo & Yokomori, 2018)。

実際に人々が言葉を選び取る活動を、個人の内部に還元せずに記述しようとするのであれば、参与者の存在およびそのやり取りは、選択したことの証拠立てとして重要であるといえる。

3. 研究方法

本節では、本研究の方法について述べる。3.1節では本研究の手法が会話分析の手法にのっっていることを概説し、3.2節では対象となるデータについて述べる。

3.1. 分析方法

本稿では語の選択の要因について話者の心情や認知的過程を内省的に記述することを避けるため、会話分析の手法を用いる。さらに、相互行為上の要因を可視化するために、語が形式的に・明示的に再選択される現象を対象とする。

会話分析の方法論によれば、会話上の行為は、社会を形作る際に欠かせないために、極めて方法論的 methodic である。相互行為 talk は秩序的であるため、会話上の行為は説明可能 describable であり、パターンとして理解可能であるため、再生産可能 reproducible である(Lynch, 1996; Sacks, 1992)という。会話分析は、その相互行為秩序を連鎖組織 sequence organization (Schegloff, 2007)を基本的な単位として分析する手法である。これによって、一つの発話を文脈から切り離さずに、連続した連鎖として分析・記述することが可能である。

また、日常の言語使用の実例は、第一に、発見可能ではあるが、想像可能ではない(Garfinkel, 2002: 96)。第二に、語の再選択の様子を観察しようとするのであれば、その相互行為のつながりであるシークエンス構造(Silverman, 2013=2020: 73-108)を観察する必要がある。

本稿の目的は語の選択の要因にあるため、語の選択の要因もまた、文脈から切り離されない形で秩序だっており、方法論的で、説明可能であり、再生産可能であるといえる。

3.2. 対象となるデータと分析手順および限界

本稿で対象とするデータは、録音音声会話コーパス(MacWhinney, 2007)および著者が採集した日本語の雑談、計約43時間である。本研究では、これら音声・録画データを Jefferson 方式で文字化し、元のデータと共に用いる。

まず、語形として「勉強」「学」が用いられているデータを抽出した。これらには、動詞として用いられているものもあれば(勉強する、学ぶ、等)、名詞として用いられていることもあった(勉強、学習、勉学、等)。これらは計69件あった。

次に、類義語として挙げられていた「学び」「学ぶ」「学習」が用いられているデータが3件

のみだったためコレクション作成ができないと判断して分析対象から除いた。その後、修復、ないし言い換えによって、語彙選択が観察可能な形で表れているものを抽出した。これらは全体の11件(15%)であった。

4. 分析と考察

本節では、データを分析・記述し、考察を述べる。分析の結果、a)「勉強」という語が連鎖組織上、再選択である「修復」のケースと、選択であるが「修復」ではないケースがあることが分かった。また、b)自己修復が行われているケースの中には、①他部の前景化、②描写の最適化、③行為にあった発話デザインへの調整、の3つの相互行為上の目的があることがわかった。次節から、それぞれに分けて詳述する。

表2 分析の結果

	相互行為上の要因	語の再選択	語に着目した際の要因
修復 (再選択)	他部を前景化させる	・勉強する→やる	「勉強する」が描写性が高く、再利用する理由がないから
	描写を最適化する	・英会話→英語の勉強 ・やる→勉強する	「勉強」がこれから語ろうとすることに合うから
	行為に適した発話デザインにする	・勉強→技術が身につく / トレーニング	語「勉強(する)」の過程性=非達成性が行為に合わないから。
非修復 (選択)	同じフォーマットを使って【冗談】を言う	・楽しくやる→楽しく勉強する	「勉強すること」は「楽しいこと」と対比されるから

4.1. 修復の中の再選択

本節では、「勉強する」が他の語に再選択される場合について、それぞれ断片を紹介しつつその記述の妥当性を例証する。分析の結果、①他部を前景化させて他者開始修復に対処する、②語りのために描写を最適化する、③発効する行為にあった発話デザインにする、の3つの選択要因が観察された。順を追って分析を示す。

4.1.1. 他部を前景化させて他者開始修復に対処する

「勉強する」という語の再選択は、語をより汎用性の高い語に置き換えることで達成されることがある。その再選択は、修復操作として、相手からの協調的な反応を取り付ける際に用いられる。この断片では、Kazu と Taku がハイスクールの授業内容について話をしている。Taku は Kazu の先輩にあたり、Kazu が現在受講している授業をすでに受けたことがある。

断片3. 他部を前景化させて他者開始修復に対処する CallFriend japn6277

022 Kazu: なんか宿題はないけどなんかあ :: リサーチとかなんかでラテン

に重要であることを相手に示すことになる。

これは、042行目の反応の位置からも証明できる。042行目は「やっているような」の発話直後で開始されるため、その箇所までに反応可能な位置があることが示されている。ということは、ラテン語の学習が「うざい」ことの説明が、「歴史を二つ」を固定することによってなされたことが、他の参与者によって確認された位置であるといえる。このことから、不必要な要素が削除され、また汎用性の高い語に置き換えることは、それ以外の箇所を固定し、前景化することとして用いられていることがわかる。

ここから、「勉強する」という述語は、他の部分が重要である場合においては、動詞として他を目立たせなくさせる可能性がある。言い換えれば、この動詞が行為を描写する際の粒度が高いと仮説できる⁽⁷⁾。これは逆に言えば「歴史を二つ」という固定したい箇所に対して統語上述部が必要であるだけで、語「勉強する」を使用し続けること自体には相互行為上、積極的な理由はない、ということでもある。二重の意味において、汎用性の高い語に置き換えることが、相互行為上適切であり、また、実際にそれがなされているのである。

4.1.2. 語りのために描写を最適化する

以上では描写性の高さが問題となり、語を汎用性のある語に置き換えることが行われていた。一方で、語りのための描写を適正化するために、「勉強」の語が用いられることがある。

次の断片では、「英会話」が「っていうよりも」という比較表現によって「英語の勉強」に言い換えられている例である。この断片の冒頭では、Aya が自分の英語力のなさについて述べている。003行目から、新しい話題へと移行している。

断片 4. 語りのために描写を最適化する CallFriend japn1724

((アメリカ人はおつりの計算ができないため、だまそうと思ったら釣銭をだましとれるのではないかという話の後で))

- 001 Aya: ああのお :::: こっちの英語が足りないから
 002 そこまで通じな(h)い(h)と(h)思(h)う(h)け(h)ど
 003 Taka: Huhuhu! .hhh huh! .h [あれですか? = いまああのお :::
 004 Aya: [.hhh! .hhhhh
 005 Taka: なんか英会話とかなんか :: そんなんやっぱり - (0.2)
 006 行ってみえるんですか? =
 007 Aya: → = ええ! (.) .hhh あのお :: (.) .hhh 苦労してねえ - =
 008 → = 英会話っていうよりも英語の勉強で [しょうかねえ _
 009 Taka: [(>> 勉強ですか .<<)
 010 Taka: あんほん . = 00h:07m:23s
 011 Aya: = あのお :::, .hhh ¥ 苦労してえ , ¥ (0.2) ¥ あのもうねえ ¥

012 .hhhh¥ 授業中「指されなければいい指されなければいい」¥

013 ¥ と思ってずう :::: つとし [た向いてるんだけどね, ¥

014 Taka: [ahahahaha uhuhuhu!

((教師があまり表情を変えない人であるため、英語の勉強も嫌いになりそうだという苦労話が語られる。))

005-006行目で Taka は、「英会話とかなんか :: そんなん」というように、大きなカテゴリーとして英語を習うことをとらえている。それに対して、Aya が「ええ!」と即答し、「あのもお ::」「苦労してねえ」と述べることで、【苦労の語り】が投射される(007行目)。しかし、その語りは途中で中断され、「英会話」ではなく「英語の勉強」であると修復される。「英会話→英語の勉強」が自己修復の連鎖であることは、007行目で用いられた「苦労して」という語が 011行目に繰り返されていることからわかる。

その後に Taka が「勉強ですか. あんほん.」と反応していることから、この修復のトラブル源が005行目の語「英会話」にあったことが参加者の間で了解されている⁽⁸⁾。参加者の中では、「英会話」と「英語の勉強」には差があるのだ。

どのような差があるのか。「英会話」と「英語の勉強」を語義レベルで比較すれば、英語能力の結びつきの差があることがわかる。「英語を勉強する」ことは学習の成果を保証しない過程であることを含意する。一方、「英会話をする」ことは、ある程度の英語能力がすでに備わっていることを示す。ここで「英会話」ということを言うことは、Aya が直前に述べていたこと(001行目-002行目「こっちの英語が足りないからそこまで通じない」と矛盾してしまうのである。

しかし、それだけではない。007行目で Aya が「苦労」話を始めていたことを思い出そう。この「苦労」は“先生が「指す」せいで英語の勉強が嫌になりそうである”という内容である。確かに、英会話で相手を授業的な意味で「指す」ことはなさそうだ。つまり、ここでは「英会話」が「英語の勉強」より英語に熟達した者が行う活動であること以上に、Taka が英会話のことを話している前提でいると、Aya の苦労話がわかりにくくなってしまう可能性に対処もしているのである。

ある語りをを行うためには、その語りの前提となる状況について語り手と聞き手の間で了解を作っておく必要がある。この断片において言えば、「英語の勉強」は、「英会話」と比較して、より教師の介入が強く苦労するものとして適正な表現であることが参加者間で了解されているのである。そしてその了解がなければ、Aya の苦労は伝わりにくくなってしまう。そのことに Aya は語りの冒頭で対処しているのである。この意味において、描写を最適化するといえる。

次の断片でも、語りのために描写を最適化することが行われている。ここでは、「ここで社会学やる」が「アメリカの大学で社会学とか勉強する」に置き換わっている。

この断片では大学卒業後に何をするかが話題になっている。SK は、学部から大学院に進学することを目指しているが、現在行っている大学では多くの人が社会人を一度経験して大学院

に入っているため、そのまま大学院に行くと働く機会がなくなってしまうことを危惧している。HOはそのことを聞いて、2、3年日本で働いてから戻ってくるのか、と問う(692行目)。

断片 5. 語りのために描写を最適化する CallFriend japn6149

692 HO: またも - 戻ってくるって感じになんの？そし [たら .
693 SK: [うう :: ん .
694 (0.8) 00h:27m:29s
695 SK: でも [その -nn もうなんかね , もっと .hhhh もっとねえ？
696 HO: [(°> ほんほんほん _<°)
697 (1.5)
698 SK: → あのお :, (0.9) ° うう :: ん .° (0.8)
699 → だからここで社会学やるんだったら -> アメリカの大学で
700 → 社会学とか勉強するんだったらあ , < [.hhhhhh
701 HO: [うう :: ん .
702 (.)
703 SK: やっぱりあのお :::, (0.5) なに ?= もっとねえ :::, (.)
704 SK: < 周りのことがわかんないとねえ , > ((アメリカの実情、の意))
705 HO: ° う :: ん .°
706 (1.1)
707 SK: だめなのよ .

693行目でSKは、692行目のHOの極性質問 Yes-No question に対して「うう っん。」と答えるのみで、「うん」や「そう」等の選好応答を返しているとはいえ、後に何らかの説明などが投射される。実際、SKは695行目で「でも」と逆接し、695-698行目まで「あの」(Hayashi, 2005)やカットオフ、間、吸気、引き延ばしなどを用いて、産出にトラブルがあることをHOに示す。699行目の「だから」は、中馬(2019)によれば、修復開始者にトラブルの責任があるというスタンスを示しつつ、修復の実行開始をマークする言語資源だとされている。この場合、修復開始者はSK 自らである。そのため、ここで「修復開始」の言語資源である「だから」を改めて配置することは、発話を再構成することに用いられているといえる。

さて、ここで「ここで社会学やる」の「> アメリカの大学で社会学とか勉強する<」への置き換え要因を検討しよう。「> <」で示された早い話速は、その活動が極力進行性を妨げないようにしていることを示している。つまり、「ここで社会学やる」ということと、修復先の内容が「ほぼ同じ」であるということを表示すると言える。

一方で、「ほぼ同じ」であるにも関わらずここで修復の必要があるのは、それが「ほぼ同じ」では困るからだろう。ここでSKが「ここ」を「アメリカ」に置き換えているのは、その

後の行為において、「アメリカの実情(=「周りのこと」)がわからなければ社会学を学ぶ上で弊害があるが、それが今はわからなくて悩んでいる」という【悩み語り】を行ううえで、「ここ」が「アメリカ」という国を指すことを明示的に示しておく必要があるからである。このことから、【悩み語り】に「やる」という語の選択は、なんらかに不十分であることが示唆される。

ここで「やる」を「勉強とかする」と言い換えることは、【悩み語り】において、勉強という活動の過程において「周りのこと」をわかることが必要であることを明示できる。この断片は、4.1.1とは逆に、「やる」という汎用性の高い語の曖昧性を排除することで、相手に悩み語りの主題 topic をより理解させようとするとしている。そのため、「やる」が修復と関係しているという点では共通しながらも、断片4とは別の目的を持つ。

以上の二つの断片から、「語りにあった描写」への適切性が、勉強という語を / から再選択する際の選択要因になっていることがわかった。

4.1.3. 発効する行為にあった発話デザインにする

本節では、前節に類似して、これから行おうとする行為にあった発話デザインをするために、語「勉強」が置換される様子を見る。

ここでは、「勉強した」が「技術が身についた」に再選択されている。この断片では、Rがアメリカの大学院の研究室に留学し、論文を助手との共著で出した。だが、結局のところそれができたのはほとんど助手の手柄であるという。さらに、最近の1 か月はプログラミング言語である C++ を勉強しただけで終わった、と手ごたえのなさについて不満を述べている。

断片 6. 【不満述べ】のために達成動詞に置き換える CallFriend japn4608

- 357 R: で昔は()なんでシープラプラ((c++))全然やってなかった
358 んだけど今シープラプラ :: なんか , .hhhh 一か月勉強してえ ?
359 (.)
360 L: うう :: ん .
361 R: .hhh でなんかプログラム書いて終わったって感じかなあ :: んん .
362 L: ふう :: ん _
363 (.)
364 R: → .dhhh 全然なんかそのお :: , (.)
365 → .hhh うう :: んあれしたって感じしないよお :: , そのお :: ,
366 → な(h)ん ㍻ か勉強した ㍻ っていうか , こお :: , (.)
367 → .sss [技術が身についたって感じしないもお :: ん .
368 L: [ええ -
369 え [え(が-)
370 R: [まあ新しい - .sssss [ss ラングエージちょっとわかった

再選択先の慣用句である「技術が身についた」は、361行目で終了する【愚痴】に対して、362行目で【共感】などの適切な反応が返ってこなかったことを発生原因としている。その意味で358-361行目の発話とその反応の不在を分析することも重要であろう。358-361行目でプログラミング言語のC++を「一か月勉強してプログラム書いて終わった」と述べることは、「勉強した」という過程について述べつつ「プログラム書いて終わった」という結果があるという点で、事実の説明を行っているようにも見える。事実、その説明に対しての反応が362行目のように弱いということは、LがRの【不満述べ】という行為が十分に発効されたとみなさなかつたことの証左である。

そのため、364-367行目は【不満述べ】の再挑戦 second try であるとみることができる。そのため、行為をより明示的な言語リソースによって再構成できる位置でもある。その場において、「っていうかこう技術が身についた感じがしない」ということは、相互行為上必要な行為をより充足させるために(再)選択されていると考えることができる。

特に366行目に用いられている「こお…(こう)」は(a)描写的な語が後に来ることを投射すること、(b)話者が描写に難しさを感じていること、を示す言語資源である(Kushida & Hayashi, 2022: 75)。そのため、「っていうか」「こう」を連続して使用することは、話者の目的(すなわちここでは【不満述べ】の行為)に、より適切な描写が後に来ることを投射しつつ、そこに話者が難しさを抱えていることを示す言語資源になっているといえる。

この点において、「勉強した」という語と「身についた」という語を比較すれば、「勉強した」は「勉強する」という過程が完了したことを示すのに対し、「技術が身についた感じがしない」はスキル修得の「非達成」として用いられている。このため、「勉強した」をトラブル源として週及的に問題があるものとして扱うことは、366行目の直前のみならず、358行目で失敗した【不満述べ】をも含むことになる。このことによって、不満述べの対象が「勉強する」ことの「過程」の問題ではなく、「技術が身についた」かどうかという「成果」であることを示しているのである。このような「成果」を問題とする文脈において、「勉強する」が持つ過程の意味はその成果対象を十分に表すことができないのである。

次の断片でも同様に、「勉強」の持つ語の不十分さが指向されている。ここでは、「勉強」が「そういう学習」に対置されたのち、「そういう意味」に置き換えられ、さらに「トレーニングって意味」に置き換えられている。ここでKonは、知り合いのAに比べて、自分の英語力に引け目を感じている。005行目で「30(歳を)超えてから」だと英「単語を覚えられない」と述べる。それに対する009行目は、Lを慰めているように聞かれうる。010行目の「でもお…」として逆接として提示される一連の複数ターンの発話もまた、【自己卑下】に対して逆接するという点で【励まし】になっているといえるだろう。

断片7. 【慰め】のために価値のある語に変更する CallFriend japn6228

((Konは英語が下手だが、仕事で1日20本程度の電話対応をさせられている。英語を覚えようとしている

が、30歳を超えた Kon にとっては難しいという。))

005 Kon: ¥ そう30超えてからやるのって単語覚えら [れないね .¥

006 L: [ehhhhhhh

007 L: hahaha! (0.2) [.hhhhh

008 Kon: [¥ほんと覚えられないなあ .¥

009 L: ¥んまあそういうなよお hohoho! ¥=.hhhhhh

010 L: → でもお :: コンちゃんやっぱ環境下としてはあ、

011 (0.4)

012 L: → まあ! (0.3)その仕事はねえ、ちょっとさておいてさあ、べー

013 Kon: うん . =

014 L: → = まあ勉強とかそういう学習 - なんていうのお? (0.2)

015 L: → そういう意味ではあ :: トレーニングっていう

016 L: → 意味ではさあすごいやっぱいい環境だと思うよお、

017 (0.3)

018 Kon: うんトレーニングってったってほんとオン・ザ・ジョブ

019 Kon: トレーニングだもん [ねえ、

((以下略：グラスなどでは日本人が固まるため英語の練習にはならないということが述べられる))

ここで、012行目の「べー」はおそらく勉強であろう。後の014行目では「勉強」を「とか」で対置させ、「そういう学習 -」でカットオフしている。次に、「なんていうのお?」と適切な語を選択しようとしている際に用いられる、「自己に向けられた質問 self-addressed question (Endo and Yokomori, 2018)」を行っている。ここから、Lは慰めに、より適切な語を漸進的に選択していることがわかる。

さらに、ここでの「そういう意味」は、指示詞を用いてはいるものの選好する文脈を指示してはいない(cf. Hayashi, 2005)。むしろ、ここでは、まだ完全に描写されていないことをいったん保留し、話を進めているといえる⁽⁹⁾。ここからも、話者がこれまでの語の選択が不十分であることを聞き手に示しながらターンを継続している様子が観察可能である。

さて、ここで「勉強」は「学習」と対置されつつ、しかし「トレーニング」に置き換えられている。ここには、この断片の前に、Konは繰り返し、仕事で英語を「鍛えられている」と述べていることが関わっているだろう。Lは、Konの状況を「勉強/学習」として描写することが不適切だと示しつつ、最終的に「トレーニング」と描写することで、Konの置かれた状況そのものを評価することによって【慰め】ている。さらに、「トレーニング」が、同意を取り付ける表現である「やっぱ」とともに用いられていることは、「(あなたも感じているように) やっぱ」「トレーニングっていう意味では」「いい環境だ」という高評価を産出することになり、

相手の同意を取り付けつつ高評価を行っているのである。

ここで「勉強」や「学習」が不十分であるのは、それぞれの語が【慰め】に適さないからである。「勉強」であれば、それは過程動詞であるため成果を保証しない。また、「学習」は達成動詞ではあるが、体系的であることを含意する。一方で、Lは【慰める】ために、Konが置かれている状況そのものの価値を見出す必要がある。それは、20本の電話を毎日受ける、まさに018行目の「オン・ザ・ジョブ」で行われる、非体系的で、かつやれば結果がついてくる「トレーニング」であるのだ。その意味で、「勉強」「学習」は、Konが置かれる状況を正確に描写できない語なのであり、【慰め】行為に不適切なのである。

4.2. 修復ではない選択

前節では、修復の実践にかかわる断片を観察した。本節では、修復とはかかわらない断片を観察しよう。確かに、このタイプの断片は1件しか見られなかった。しかし、修復以外の用法を観察することは、語の選択が修復以外でも起こりうることを示唆する重要な手がかりとなるだろう。

さて、この用法においては、「勉強する」という語が「楽しくやる」ということと対比されて使用されている。この意味において、「勉強する」という語は「楽しくやる」ということと選択的に利用されている。

断片 8. 【冗談】として用いる Callfriend japn6716

((旧来の友人である Naoko と Toru が話している。Naoko はアメリカ本土で留学しているが、残り半年で卒業であるにもかかわらずそのあとの進路が決まっておらず「そのことを考えるだけで頭が痛い」と述べている。一方、Toru は働き始めて、ハワイでお得意さんを相手にゴルフ接待をしている。この前に、Toru の近くに大学が一緒だった「友だち」が引っ越してきたことが語られる。))

001 Naoko: 近くに住んでんの? (0.5) 近くに住むのお?

002 (0.7)

003 Toru: ううん _

004 (0.4)

005 Naoko: ¥一緒に住むのお?¥

006 (0.3)

007 Toru: ううん _

((中略))

015 Naoko: まあ :: 楽しくやってくださいよ .

016 Toru: → うう :: ん _

017 Naoko: ううん .

018 (0.3)

019 Naoko: .hhhh なんかあ ,
 020 Toru: まあ ♫ 楽しく勉強してくださいよ . ♫
 021 Naoko: huhh ♫ うるさいなあ . ♫ .hhhh
 022 Toru: [huhehe
 023 Naoko: [いいでもいいんだあでもいいんだああたし - あし
 024 昨日ね私スキーいったんだあ ::: いいでしょお :::?

この断片で重要なのは、020行目が冗談として用いられていることだろう。015行目と020行目が、「まあ楽しくVてくださいよ」という形式で同一のものであることに注目しよう。このような同一形式を繰り返すことは、その形式以外の箇所を際立たせることに貢献する(cf. Goodwin, 1990: 151)。つまり、ここで言い換えられた「勉強して」部分が、020行目の産出によって週及的に強調され、いわゆる【いじり】の行為として成立するのである。

さらに、「勉強する」を強調することは、Naoko と Toru の現在の状況をも対比させる。この文脈までに、Toru は仕事としてハワイでゴルフ接待をすることがあると述べてきた。さらに、そこに大学の時に一緒だった「友だち⁽¹⁰⁾」が引っ越してきている。このことは、Toru の生活の充実を述べることに近い。一方で、Naoko は卒業後の進路も決まっていない。「勉強する」という語を強調させることは、この対比を強調させることなのである。

その意味において、023-024行目で「スキーに行った」ことをあからさまなやり方で演技的に自慢するのは、自己の充実を語ることになっている。このことから、Naoko 自身も、「勉強する」という活動に終始することが、「充実すること」と対照されていることを理解していることがわかる。

その意味で「やって」を「勉強して」に置き換えることは、単に語を「詳しく」置き換えることではなく、相手が嫌がるような語を選んで、カウンターを行うという意味で【冗談】を言うために用いられている。

5. 結 論

本稿では、語「勉強」が(再)選択される際の状況を記述・分析してきた。今回の分析は、ごく少数のデータであるため、その現出の類例を取り上げて妥当性を判断する必要がある。一方で、自然会話から抽出した断片の記述で分かったことから、リサーチクエッションに一定の答えを出すことができるだろう。

日常会話において「勉強(する)」という語が再選択・ならびに被再選択される際、シークエンス上で選択の要因になっているものは、以下の3つにまとめられる。
 選択要因1: 「やる」「こんな感じ」等と置き換わることで相手に描写する際の粒度を調整

するため。

選択要因2：勉強(する)の持つ「過程＝非達成」の аспекトが不正確な描写を起こすのを回避するために、「技術が身につく」「トレーニング」等と置き換えるため

選択要因3：「英会話」や「楽しくやる」に置き換わることで「勉強(する)」という語の持つ能力の高低性・非娯楽性との対比を行うため。

ここから分かることは、「勉強(する)」の類義関係についていえば、「勉強(する)」はその類義語の中で選択し直されているわけではなく、むしろその場の相互行為的・局所的な要請に合わせて置換されているということである。そこには、今回観察された限りにおいても「描写の粒度」「アスペクト」「能力の高低」「非娯楽性」がかかっていた。

また、副次的な結果として、「勉強」という語を我々が「多面的立体(古田, 2018)」として理解しているという場合についても述べるができるようになる。勉強は上で見たように【悩み語り】や【不満述べ】等の行為に多く再選択されている語であることがわかる。【冗談】の用法でさえ、「勉強」はマイナスのイメージを持つ語なのである。「勉強」という語は、なんらかの超越的な実体(ないし特定の活動)を指すものではない一方で、選択される際の使用法としては、「不調」を伴う際に用いられる相貌を持つ。その意味においては、「勉強(する)」という際に我々に起こるある種のネガティブなイメージが、これらの使用からもたらされているものであると仮定できる。

本稿の結果は、Kecskes (2013)の社会認知的アプローチや Kahneman (2011)等を援用する研究などの認知主義的研究の主張とは背反しない一方で、相互行為的な要因を見出したという点で語の選択の研究に一定の貢献があるといえる。言い換えれば、我々が「無意識に」語を選択しているという場合、上記に示したような選択要因が働くことで、様々な連想される語の中から「勉強(する)」という語を選択している可能性があるのである。

今後の課題としては、それぞれの語の対象や共起語との関係で、前提となる語彙の意味を踏まえることで、語の選択の要因に、語彙・文法・文脈のどの側面が効いているのかの判定を、データに即して行う必要があることが挙げられる。

謝辞

査読者、および、関西 EMCA 互助会の平本毅氏、中川敦氏、劉礪岩氏、許家瑤氏の各位より貴重なコメントを頂きました。感謝いたします。

助成

本研究は2021年度 学術研究推進助成費(京都橘大学)、ならびに JSPN 科研費の22K13121の助成を受けたものです。

注釈

- (1) 畠山(2008)を援用すれば、「学習する」の場合、「二次関数が学習してある」という語形を取ることができるが限界動詞を判断する決め手になるように思われる。著者の判断では、例えば「学習済みですか」の意味で「あの生徒は二次関数を学習してありますか?」と問うことは可能であるように思われる。そのため、ここでは便宜上「学習する」を限界動詞“的”とした。
- (2) ただし、Vendler (1967)は、Ryle の示した「I am studying geometry とはいえるが、I am knowing geometry とは言えない」という現在進行形のルールが、フランス語やドイツ語には適応されないことに、Ryle が非自覚であることを批判している。この点において、「私は幾何学を {勉強している / 知っている}」とも日本語では文法的であるため、英語におけるアスペクト的研究がそのまま適応できない可能性については、注意を要する。
- (3) Kahneman (2011: 22)によれば、人間の思考法は System1 と呼ばれる動物的・直観的な思考と、System2 と呼ばれる自主性・選択・集中といった複雑な認知処理を要する心的な活動である熟慮的思考に分けられるとされている。
- (4) 語が「間違われる」現象は、他の語が別の語を代用してしまっているために誤用研究において「代用型」(寺尾, 2002)と呼ばれている。
- (5) 10種類には、①置き換え、②挿入、③削除、④検索、⑤かっこ付け、⑥放棄、⑦連鎖ジャンプ、⑧再生、⑨再構成、⑩並べかえ、がある。Schegloff 自身はこれ以上の種類がある可能性について示唆していることも注意されたい。
- (6) 修復は、誰が修復を開始し、誰が修復を実行するかで以下の4つの分類が可能である。①自己開始 - 自己修復、②自己開始 - 他者修復、③他者開始 - 自己修復、④他者開始 - 他者修復、の4つである。
- (7) 今回のデータでは仮説にとどまるように思われる。今後、どのような述語・述部が「やる」に置換されるのか、さらに探求する必要がある。
- (8) Taka が009-010行目で修復を了解しているので、他者修復の実行であると Taka は聞いているが、一方で Aya はすでに07行目で語りを始めてしまっているため、語りの方向を修正するような一種の自己開始・自己修復であるようにも見える。
- (9) 例えば、Hayashi (2005)は、進行性を確保するために、指示詞「あれ」がプレースホルダー place-holder として、ターンが終わるまで後続する要素の検証を遅延させる際に用いられることを指摘している。
- (10) 001行目から Naoko が友だちについて再度言及を始めたのは、それが Fishing-Device (Pomerantz, 1980)になっていると予測できる。これまで Toru は「友だち」の性別について述べていないため、ここで性別が女性だとわかれば Toru を「茶化す」ための要素を入手することになる。一方で、「友だちって女の人?」と聞くことは、相手から半ば強制的に情報を引き出すという点でプライバシーを尊重しないスタンスを示すことになる。

引用文献

〈和文〉

- 飯田隆(2007). 日常言語の哲学 分析哲学 I. 哲学の歴史. 中央公論新社. 565-606.
- 岩本遠億 [編著] (2008). 事象アスペクト論. 開拓社
- 串田秀也・平本毅・林誠(2017). 会話分析入門. 勁草書房
- 篠原俊吾(2019). 選択の言語学. 開拓社
- 鈴木基伸・湯艶・梅野由香里(2019). 日中同形語「勉強」「無理」「上等」「必死」の分析と日本語教育への応用について. 大手前大学論集. 20, 83-106.
- 田中春美・田中幸子 [編] (1996). 社会言語学への招待. ミネルヴァ書房
- 千々岩宏晃(2015). 日本語の雑談での「あなたに関する知識を示す発話」の会話分析を用いた研究: 発話末の下降調の「ジャン」に着目して. 日本語・日本文化研究. 25, 78-89.

- 中馬隼人(2019). トラブルの責任の所在を示す相互行為プラクティスー他者開始・自己実行の修復に用いられる「だから」を例に一. 語用論研究, 21, 78-99.
- 寺尾康(2002). 言い間違いはどうして起こる? 岩波書店
- 畠山真一(2008). 動詞の限界性を判定するテストセット. 尚絅学園研究紀要A. 人文・社会科学編, 2 (0), 27-39.
- 古田徹也(2018). 言葉の魂の哲学. 講談社

〈欧文〉

- Alba-Juez, Laura. (2021). Fast and slow thinking as secret agents behind speakers' (un)conscious decisions and judgements. *Journal of Pragmatics*, 179, 70-76.
- Drew, Paul. (1997). 'Open' Class Repair Initiators in Response to Sequential Sources of Troubles in Conversation. *Journal of Pragmatics*, 28, 69-101.
- Endo, Tomoko., & Yokomori, Daisuke. (2018). Interactional functions of verbalizing trouble: Self-addressed questions in Japanese conversation. *Japanese/Korean Linguistics*, 25, 327-339.
- Enfield, N.J., & Sidnell, Jack. (2017). *The Concept of Action*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Garfinkel, Harold. (2002). *Ethnomethodology's Program*, A.W. Rawls (Ed.), Maryland: Rowan & Littlefield Publishers.
- Goodwin, Charles. (1987). Forgetfulness as an Interactive Resource. *Social Psychology Quarterly*, 50(2), 115-131.
- Goodwin, Marjorie Harness., & Goodwin, Charles. (1986). Gesture and coparticipation in the activity of searching for a word. *Semiotica*, 62 (1/2), 51-75.
- Goodwin, Marjorie Harness. (1990). *He-Said-She-Said: Talk as social organization among Black Children*, Indiana: Indiana University Press.
- Hacker, P.M.S. (1996). *Wittgenstein's Place in Twentieth-Century Analytic Philosophy*, Basil Blackwell.
- Hayashi, Makoto. (2005). "Referential problems and turn construction: An exploration of an intersection between grammar and interaction." *Text - Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse*, 25(4), 437-468.
- Hayashi, Makoto., Hosoda, Yuri., & Morimoto, Ikuyo. (2019). "Tte yuu ka as a repair preface in Japanese." *Research on Language and Social Interaction*, 52(2), 104-123.
- Hudson, Richard. A. (1996). *Sociolinguistics* (2nd Edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Jefferson, Gail. (2004). Glossary of Transcript Symbols with an Introduction. In G. Lerner (Ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, pp.13-31. John Benjamins Publishing Company.
- Keckes, Istvan. (2013). Why do we say what we say the way we say it? *Journal of Pragmatics*, 48, 71-83.
- Kahneman, Daniel. (2011). *Thinking, fast and slow*, NewYork: Farrar, Straus and Giroux.
- Kushida, Shuya., & Hayashi, Makoto. (2022) Indicating Difficulty in Describing Something in Words: The Use of Koo in Word Searches in Japanese Talk-in-Interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 55:1, 59-78.
- Lynch, Michael. (1996). *Scientific Practice and Ordinary Action*. Cambridge University Press. (水川善文 他訳(2012). エスノメソドロジーと科学実践の社会学, 勁草書房).
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project, In J.C. Beal, K.P. Corrigan & H.L. Moisl (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Sharrock, Wesley., Coulter, Jeff. (2009). 'Theory of Mind': A Critical Commentary Continued, In C. Leuder, & A. Costall (Eds.) *Against Theory of Mind*, pp.56-88. Palgrave Macmillan.
- Silverman, David. (2013). *A Very Short, Fairly Interesting, Reasonably Cheap Book about Qualitative*

- Research*. SAGE Publications. (渡辺忠温訳(2020). 良質な質的研究のための、かなり挑発的でとても実践的な本, 新曜社).
- Pomerantz, Anita. (1980). Telling My Side: "Limited Access" as a "Fishing" Device. *Sociological Inquiry* 50(3-4), 186-198.
- Ryle, Gilbert. (1949). *The Concept of Mind*. Hutchinson. (=1987, 坂本百大 [他] [訳], 『心の概念』, みすず書房).
- Schegloff, Emanuel. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel. A. (2013). Ten operations in self-initiated, same-turn repair. In M. Hayashi, G. Raymond, & J. Sidnell (Eds.), *Conversational repair and human understanding*, pp.41-70. Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382.
- Vendler, Zeno. (1967). *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.

付記：文字化記号（Jefferson 2004を改訂）

記号	説明
((コメント))	転記の際に、記号で表せない事柄や、事情の説明などに用いられる。
(s.ms)	沈黙を表す。(.)と数字を伴わない場合は0.2秒以下の間、sは秒、msはミリ秒を表す。
→発話	ターゲットライン(記憶の心的述語の発話・ターン)を示す。
発声	発声の音量(volume)が他と相対的に大きいことを表す。
◦発声◦	発声の音量(volume)が他と相対的に小さいことを表す。
↑発声 ↓発声	直前より高い声(high pitch)・低い声(low pitch)で話されている箇所を示す。
発話!	発話の終わりが跳ねるような音で終わっていることを表す。
発話・発話_	発話の終わりが下降調・平坦であることを表す。
発話?・発話;	発話の終わりが上昇調・下上動であることを表す。
発せ::い	直前の音が引き延ばされていることを表す時に用いる。
<発声> >発声<	発声が直前よりゆっくり・速く話されていることを表す。
発-	発声が突然終わるような音である事を表す(カットオフ: cutoff)。
発話A = 発話B	発話Aのすぐに間髪おかず発話Bが続いている事を表す(ラッチング: latching)。
h h h h	聞き取り可能な呼気に用いられる。音量が大きい場合は H H H H と表す。
. h h h h	聞き取り可能な吸気に用いられる。音量が小さい場合は . H H H H と表す。
発 h 声	発声に呼気が混じっていることを表す。
hahaha hehehe	hの後ろに母音 a/i/u/e/o を伴ったものは、「ふふふ」「へへへ」等の笑いを表す。大きい場合は H A H A H A のように大文字で表される。
¥ 発声 ¥	笑いを含んだ音で発声されている (smily voice) ことを表す。
発(h)声	笑いながら発声されていることを表す。
[発話A] [発話B]	発話AとBが、[で示された位置で同時に始まっていることを表す。分析上重要な場合、]によって、終了された位置が示されることもある。